
本の紹介 **動物の命は人間より軽いのか** **世界最先端の動物保護思想**

マーク・ベコフ著、藤原英司・辺見栄訳
中央公論社 2005年7月10日発行、248ページ

本谷 勲

JWCS 理事（会報掲載時）・東京農工大学名誉教授

動物たちと私達人間とのかかわり方を振り返ってみると、野生動物への対応（この中には棲息地における問題や野生動物商業取引もある）、ペットあるいはコンパニオン動物とのつきあいの他に、動物園の動物、医薬実験用動物などの局面があることは誰でもが思いうかぶところだろう。反対に家畜・家禽などは BSE とか鳥インフルエンザなどのように農業や食糧の問題として考え、その中心に動物がいることは、意識にのぼってこないのが普通ではないだろうか。さらに魚釣りはリクリエーションかスポーツであって、生きた動物が相手になっていることは忘れられていないだろうか。魚釣りのトロフィーやリールの性能に関心はあっても、一匹の魚が釣り上げられた後、それが卵を持ったメスであって産卵の機会が失われたと考えることはないだろう。あるいは若い個体であって、成熟する前途を絶たれたと気付くこともないだろう。

動物と人間のかかわりを考えるといても、私達は通常その全貌を見渡すことはしない。ワシントン条約とかペットの飼育環境とか、個々の問題を取り扱っている。個々の問題を全体の中に位置付けることもしないで済ませている。

この本は小冊ながら、動物と人間とのかかわりの現状について全貌を扱っていて、動物に対する私達の姿勢に再検討を迫るユニークな本である。

目次を眺めてみよう。

まえがき ジェーン・グドール

贈ることば

第一章 動物への思いやりの第一歩

第二章 人間世界のなかの動物たち

第三章 救命ボートの中の人間とイヌ—誰が救われ、誰が死ななければならないか？

第四章 動物は痛みや苦しみ、不安を感じるか

第五章 動物には自意識があるか

第六章 動物の権利、動物の福祉

第七章 功利主義と動物の利用

第八章 オオカミの野生復帰問題—個としての動物と種としての動物—

第九章 動物園、野生動物テーマパーク、水族館

第十章 野性で生きることはよいことなのか？

第十一章 食物としての動物

第十二章 化粧品テストや衣服に動物を利用すべきか

第十三章 生体解剖は許されるか

第十四章 未来への鍵—人間中心主義との決別

マーク・ベコフとジェーン・グドールによる至福

千年のスローガン

謝辞

資料

解説 藤原 英司

もとの本の題は、STOROLLING WITH OUR KIN—Speaking for and Respecting Voiceless Animals
で、日本語の題名ともども本書の内容は格好な問題提起となるだろう。

(JWCS 会報 No. 42 2005 年 8 月より転載)